

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520076
 研究課題名（和文）精神分析の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み
 研究課題名（英文）Researches for relocating historical development and actual raison d' être of psychoanalytical movement on the coordinates of the enlightenment thoughts

研究代表者
 立木 康介（TSUIKI Kosuke）
 京都大学・人文科学研究所・准教授
 研究者番号：70314250

研究成果の概要（和文）：啓蒙の時代を代表するカントとサドを西洋倫理思想の歴史的展開のなかに位置づけるジャック・ラカンの観点に依拠し、プラトン、アリストテレスから、エピクロス派、ストア派を経由し、18世紀のリベルタン思想にまで流れ込むヘドニズムの伝統と、カントとサドによってもたらされたその転覆の意義とが明るみに出された。

研究成果の概要（英文）：Elucidations of the hedonist tradition since Plato and Aristotle, via the Epicurean and Stoic Schools into the libertine thoughts in 18th century, and of its subversion by Kant and Sade, following the point of view of Jacques Lacan who locates Kant and Sade as philosophers standing for the Enlightenment Age, in the development of western ethical thoughts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：精神分析・啓蒙思想・ヘドニズム・功利主義・力動精神医学・精神療法

1. 研究開始当初の背景

フロイトの業績をなんらかの思想史的系譜に書き込もうとする人々は、従来、フロイト思想の「ロマン派への親和性」をもっぱら強調してきた。なるほど、心的装置やその力動の概念化をフロイトが部分的に負っている科学者たち（フェヒナー、ブリュッケ、マイネルトら）へのロマン派哲学の影響、フロイトの欲動論に特徴的な二元論的思考、さら

には、ロマン派哲学を代表するハルトマンらがフロイトに先駆けて「無意識」概念を一般化していたことなど、そのような見方を支持する事実はたしかに存在する。にもかかわらず、フロイトのうちには、ロマン主義へのこの親和性を越えて、少なくともそれと同じ程度に、見方によってはそれよりも深く、啓蒙主義の伝統のうち書き込まれる思想や理念と共鳴し合う側面があることも忘れては

ならない。実際、フロイトの徹底した宗教批判（および無神論）や、拡大する科学的知への信頼」、人間本性と文明の相克というディドロ的主題のモチーフ、快楽追求を心的システムの最も基本的なプログラムと見なすベンサム的発想は、フロイトをむしろ啓蒙の思想家たちへと近づけるように見える。啓蒙思想から見たフロイトないし精神分析について、本格的な研究が俟たれていた。

本研究の着想は、J・ラカンへの参照によってもたらされた。ロマン主義的なものから最も隔たった知性の持ち主であるラカンは、彼の行った精神分析の全面的な刷新のプロセスにおいて、フロイトを徹底的にロマン派的文脈から切り離すことに成功した。1950年代に「フロイトへ還れ」のスローガンを掲げたラカンは、フロイトの「無意識」をパトスではなくロゴスの領域として定義し直すことによって、精神分析を「情動的なものの復権」と見るロマン主義的解釈を一掃したのだった。そこから出発した自らのフロイト解釈を、ラカンが「啓蒙の議論」と呼んでいることはけっして偶然ではない。ラカンは、このようにフロイトを読み直すことで、なによりもまず、アメリカ流の価値観に汚染された戦後の精神分析を、そしてより広く当時の大衆を、「啓蒙」することを望んだのである。そして実際、ラカンによって再構築されたフランスの精神分析のみが、治療実践としての精神分析の世界的な退潮傾向のなかで、今日も支持者を増やしている。ラカンによる精神分析の啓蒙および「啓蒙化」（脱ロマン主義）が、いわば、精神分析を生き返らせ、その寿命を延ばしたのである。

本研究のもうひとつの重要な参照項は、J・デリダである。2000年にパリで開かれた国際会議「精神分析の三部会」において、デリダはひとつの講演を行い、フロイトの「死の欲動」概念を今日いよいよ説得力のあるものにしていく攻撃性（制圧欲動、残酷さへの欲動）の世界的蔓延に対処するための倫理的・法律的・政治的・精神分析的プログラムの構築を呼びかけた。そのなかでデリダは、フロイトが破壊的な欲動を還元不能と見ていたこと、それゆえ、この欲動から身を守るにはたったひとつの手段、すなわち、その発現を遠回りさせ、差延させる「間接的な移動」しかないと考えていたことを強調しつつ、この「決然と醒めた」フロイトの合理主義を「われわれの時代の新たな啓蒙の光」と呼んでいる。本研究は、デリダのこの洞察に、思想的・精神分析的な観点から肉付きを与えることを課題のひとつとする。

2. 研究の目的

フロイトの思想に流れ込んでいる啓蒙主義の影響の総体を捉え、それがフロイトにおいていかに受容され、加工され、フロイト以後の精神分析に伝達されたのかを、浮き彫りにすること。そのためには、「精神分析は啓蒙思想に何を負っているか」と同時に、「精神分析を含む啓蒙思想とはいかなるものでありうるか」という二重のベクトルをもつ問いに取り組みねばならない。いいかえれば、精神分析を啓蒙の系譜へと送り返す一方、ひとつの社会的実践である精神分析によってこれまで啓蒙思想にもたらされた、あるいは今後ももたらされうる、変容を明らかにしなければならない。この二重の問いに複数の角度からアプローチし、今日の社会文化的状況に結びついた精神分析の未来、および啓蒙思想のそれについて、明確な見通しを示すことをめざす。

このことは、必然的に、一般に「啓蒙主義」と呼ばれている思想的系譜の還元不能な複数性を浮き彫りにもする。いったい何をもって「啓蒙思想」と見なされるのかという問いは、これまでも繰り返され続けてきた。だが、それにたいする解答は時代によって、地域によって、そしてそれぞれの研究者によって、様々に変化してゆかざるをえない。それゆえ本研究においても、啓蒙思想にあらかじめ単一のアイデンティティのようなものを想定して出発するのではなく、一つひとつのテーマをそのつど歴史的な文脈のなかで捉え直すことが不可欠である。ただし、いったん個別の文脈に送り返された諸々の「啓蒙主義的」思考を、そのまま放置して済ますことが本研究のねらいではない。本研究において、精神分析はなによりも、このように歴史的な分析によって分解されたいくつものテーマが再び融合するひとつの思想的「場」として位置づけられる。しかも、そこにおいてこれらの要素が統合し直される仕方は、他のいかなるディシプリンにおけるそれとも異なる、まったく独特なものであるにちがいない。それを明らかにすることが、とりもなおさず「啓蒙としての精神分析」と「精神分析を含む啓蒙」のありようを同時に浮き彫りにすることなのである。

3. 研究の方法

本研究は文献研究であり、次の六つのサブテーマに沿って系統的に進められた。

(1) フロイトの精神分析を生んだ「力動精神医学」の伝統のなかで、メスマー以来流れ込んでいる啓蒙主義的思考の諸要素を取り出すこと。これは、エレンベルガーによって間接的に素描されたものの、そのものとしては十分に考証されなかった観点である。というのも、エレンベルガーによれば、

メスマーの科学主義とピュイセギュールの博愛精神を特徴とする 18 世紀フランスの「磁気療法」の伝統はシャルコーからジャンネへと受け継がれはしたが、フロイトの精神分析はこれとは異なる系譜（ロマン主義医学）に属する、とされるからである。しかしながら、フロイトがシャルコーへの敬愛を生涯失わなかったこと、また、フロイトに催眠療法を教えたリエポーとベルネームの活動の理念がピュイセギュールのそれに通底するものだったことを、忘れてはならない。フロイトがフランス啓蒙精神医学から何を受け取り、それをどう精神分析の誕生へと結びつけたのかを、正確に把握する必要がある。

(2) ラカンにおいて特に重視される、フロイトと啓蒙思想をつなぐ二つの系譜をたどり、その意義を明確にすること。その二つとは：A/ベンサムからフロイトへと至る、心的システムの快樂追求プログラムをめぐる思考の系譜。ラカンにおいて、ベンサムとフロイトはアリストテレス以来の古典的なヘドニズムの倫理に斬新な切れ目を入れた二つの契機として捉えられている。B/サドおよびカントからフロイトへと至る、この快樂追求の「彼岸」への洞察の展開。ラカンによれば、18 世紀末にカントとサドによって方向づけられ、19 世紀に大きく花開いた「悪（苦痛）のなかの幸福」という倫理的モチーフが、フロイトの「死の欲動」概念の原型となっている。これら二つの問題系は、「精神分析の倫理とは何か」というラカンにとって最も重要な問いのひとつに直接関わっている。そこへの取り組みは、それゆえ、本研究の最終目標である「啓蒙としての精神分析」および「精神分析を含む啓蒙」という二重の問いへの解答を準備する上で、大きな鍵となる。

(3) フロイトの社会理論、文化理論のなかで、啓蒙思想と共鳴し合う諸要素を取り出し、フロイトおよびフロイト以後の精神分析におけるその展開をフォローすること。フロイトは社会理論や文化理論を構築することに関心があつたわけではない。しかし、集団心理学についての論文や、名高い著書『文化のなかの居心地悪さ』のなかには、人間集団の営む社会生活を規定する根底的な構造化の論理が素描されている。それについて、以下のことを指摘しなければならない。フロイトは、その当時にドイツ語圏で影響力をもっていたロマン主義的言説、すなわち、シュペングラーによる「Kultur/Zivilisation」の区別をまったく意に介していない。また、人間の欲動生活は文化と根本的に両立不能であるというフロイトの基本的な考え方は、彼がその読者でもあつたディドロの文明観を受け継いでいる。そ

して、フロイトが「文化のなかの居心地悪さ」と呼んだものの正体をなす無意識の「罪責感」や、その生成のメカニズム（攻撃性の内面化）、さらには、宗教がそれを利用して民心を圧迫しているという指摘は、ニーチェへ、さらに啓蒙時代の宗教批判へと遡りうるテーマである。しかしながら、これまでのフロイト研究は、彼のこうした社会・文化理論を啓蒙時代のそれとつきあわせてみるという試みをいっさい行っていない。本研究は、この欠如を補うものでなければならない。

(4) フロイトの宗教批判の射程を明らかにし、さらにラカンの宗教論の全貌を描き出すこと。フロイトは単に啓蒙主義的な反宗教論を唱えただけでなく、精神分析の実践が人々を宗教依存の状態から脱却させる有効な現実的手段であると考えていた。この点では、フロイトはディドロやヴォルテールよりもはるかに進んだ啓蒙主義者だったと言ってよい。また、ラカンも基本的に同じ考えを共有しており、精神分析が宗教にとって代わるという主張を繰り返している。しかし、ラカンはこれと並んで、科学の時代に人類が行き着く果ては「宗教の回帰」だという暗い予言を仄めかしてもいた。宗教的対立が世界を覆いつつある今日、ラカンのこの発言の不気味な明晰さに驚かすにはいられない。これらの観点から、啓蒙の時代より三世紀を経てもなお近代社会に君臨し続ける宗教に、今日の啓蒙として自らを対峙する精神分析の可能性と限界を把握することが重要である。

(5) フロイトの「死の欲動」概念を啓蒙の視点から見直す作業は、ひとつの独立したテーマとして設定されなければならない。本研究は、デリダの示唆を主要な導きの糸としてこの概念の思想史的解明に当たった。申請者は、平成 15～16 年度に科学研究費の給付を受けて行った研究「フロイトの「死の欲動」概念を受容し発展させるための思想的枠組みをつくる試み」において、このテーマについて考察を進めるための予備的な作業をすでに終えていた。本研究では、そこから一步進んで、啓蒙思想という系譜の延長線上にフロイトのこの概念を位置づけ直し、その可能な展開の方向性を探った。

(6) 今日のラカン派精神分析の動向を注視しつつ、「啓蒙としての精神分析」および「精神分析を含む啓蒙」のアクチュアリティを捉えること。ラカンの死後、その正統な後継者となった J=A・ミレールは、ラカンに倣って、あるいはラカン以上に、精神分析を啓蒙思想に接近させることを意識している。2003 年に心理療法全般を行政の管理下におく国会決議がなされて以来の、フランス精神分析の政治的抵抗運動において、

ミレールは繰り返して「啓かれたる公論」に、政府の官僚主義的支配に抗う精神分析家たちの自律と自由を訴え続けている。フランス人文主義の豊かな伝統を受け継ぐミレールのこうした身振りは、今日の「啓蒙」のひとつの現実態であり、実社会を支配する権力への抵抗のなかでそれが鍛錬され、あるいは変容を被ってゆく、その現場のひとつにほかならない。ラカン派精神分析のこのような政治的動向がいかほど正当化され、逆にいかなる限界に突き当たるのかを検証しながら、啓蒙思想と精神分析の現在から未来までを見通したい。

4. 研究成果

(1) 上記のサブテーマ 2 および 5 についての研究成果の一部は、2007 年 11 月に京都大学人文科学研究所共同研究班「啓蒙の運命」における発表「ラカンの「カントとサド」」として、また、2008 年 4 月に雑誌『思想』に掲載された論文「フロイトとサド」として、公表された。これらの成果、とりわけ後者の論文には、従来の日本の精神分析研究とは一線を画する独創的なテーゼが含まれている。

(2) サブテーマ 2、3 および 5 についての研究成果の一部は、2009 年 1 月および 2 月に雑誌『思想』に分割掲載された長編論文「結び目と振り子」の形で発表された。哲学と精神分析の思想的対話のなかでこれまで指摘されてこなかった問題（哲学は精神分析の分身でありうるか否か）を浮き彫りにしたこの論文は、この二つの領域の関係をめぐる今後のいかなる研究にも不可欠の視点をもたらしたと言える。

(3) やはりサブテーマ 2 が中心となるものの、必ずしもそれにとらわれることなく、古代ギリシャ以来のヘドニズムの弁証法的反転という観点から「精神分析を含む啓蒙」の思想的系譜を問い直す作業の成果は、18 世紀から 20 世紀にかけての啓蒙思想の展開を総覧する論集（2010 年刊行予定）に収められる論文の形で公表される。これは、本研究のテーマやその隣接領域にかかわるものとしては、ジャック・ラカンの思想的展望にもとづく国内初の本格的な論考である。

(4) サブテーマ 1 および 6 についての研究成果の一部は、2009 年 10 月に『ジャック・ラカン研究』に発表された論文「ナタリー・ジョーデル論文への序文」において、また、2010 年 6 月に雑誌『思想』に掲載された論文「ラカン派 1964-」においても公表された。精神分析発展途上国である我が国において、ラカン派精神分析の歴史的展開について、この後者の論文ほど踏み込んだ記述を行った論考はこれまで皆無だった。

このなかでとくに強調したいのは、(3) の成果である。ジャック・ラカンは、「無意

識は純粋に論理的なものに、いいかえればシニフィアンに、属している」と自ら要約するその主著『エクリ』の中心的な議論を「啓蒙の議論」と呼んでいる。言語の構造によって一次的に決定された主体を精神分析経験の担い手として位置づけるという点で、この議論はたしかに、「自我」や「自己」といった心理学的基体の社会的適応や自己実現をめざす当時のアングロ＝サクソン圏の精神分析的潮流にたいする、そしてまた、ラカンを排除することで結局のところ精神分析の可能性をそのような心理学的経験へと矮小化することに加担してしまう同時代のフランス精神分析にたいする、啓蒙の光となりえただろう。

その一方、ラカンは「啓蒙 (les Lumières)」なる語を、ルソーやヴォルテールによって、あるいはカントやゲーテによって代表される思想的潮流の名に還元することはほとんどなかった。しかも、いわゆる「啓蒙思想」についてラカンが語った数少ない箇所は、ラカンのディスコースのなかでどちらかといえば二次的な意義しかもたないか、もしくはほとんど付随的になされた議論にすぎない—たとえば、一八世紀の啓蒙主義は宗教を「騙り」として位置づけ批判したが、それはあまりに単細胞的な括りかたであり、それにたいして精神分析ならもう少し手の込んだやりかたで信（信仰）というものについて論じることができるだろう、とか、啓蒙主義はいかなる権力にもおもねらない知を言表することをめざしていたが、その担い手たちがある種の「主」たちの下僕へと身をやつしてしまっていたために、この知はせいぜいかの革命に行き着いて、周知のようにそれ以前のいかなる主よりもはるかに獐猛な新種の主たちを生み出すのが関の山だった、というように。

もちろん、これらの指摘のひとつひとつには、それなりに浅からぬ示唆が含まれていることは疑いを容れない。だが、いわゆる「啓蒙主義」が、いや、より正確には、「啓蒙主義」というラベルを多様な思想家たちの上に一律に貼つけることが、ラカンの主要な関心でなかったことは明らかである。もしそのような一般化を許容してしまえば、そこから取りだされる思想なり原理なりは、とりわけその帰結と考えられるものに目を向けるならば、ラカンにとってそれほど「啓蒙的」には見えなかったにちがいない。じじつ、啓蒙の思想家たち一般を彼のいう「快樂人」の群れと同一視するとき、ラカンがこれらの人々の系譜を書き込むのはアリストテレスにまで遡る「ヘドニズム (快樂主義)」（ただしひとつの倫理思想としての）の伝統のなかへであり、私た

ちはこのラカンの身ぶりをこう翻訳することができる。すなわち、ラカンにとって、いわゆる「啓蒙主義」(思想的潮流としての)は主体の欲望のモードにいかなる変更をもたらさなかったのである、と。

にもかかわらず、まさにこの「欲望のモード」の問いをめぐって、啓蒙の時代を代表する二人の著述家がラカンにおいて特権的な位置を占めているのはもちろん偶然ではない。その二人とは、カントとサドである。その草稿がホルクハイマーの手になるとされる『啓蒙の弁証法』の第二補論をおそらく読んでいたにちがいないラカンにとって、この組み合わせはしかし、未成年状態から脱した自律的な理性が招来しうる世界をサドが描き出したとするホルクハイマー／アドルノの視点とはいささか水準を異にする文脈に措かれている(ラカンにおいて、カントによる「啓蒙」の定義は、私たちの知るかぎり一度も想起されない)。その文脈とは「西洋倫理思想」のそれにほかならない。ラカンにおいて、倫理とはなによりも上述の「欲望のモード」にかかわる。なぜなら、それにたいする主体の関係がまさに倫理によって問われるところのもの、すなわち「法」は、ほかならぬ「欲望」と分ちがたく結びついているからである。カントおよびサドは、ラカンによって、古代ギリシャ以来のヘドニズム的伝統に楔を打ち込み、そこからの断絶を試みた主体として明確に位置づけられた。このことの意義は小さくない。なぜなら、「啓蒙の時代」から明確に汲み出されてくるカントとサドの功績を、この伝統との関係で捉え直すこと、またその逆を試みることによって、「啓蒙」と呼ばれる思想的潮流がそこへと接続されるより深層の海流を垣間みることができるからである。

カントとサドによって倫理思想の前面に押し出された新たな「欲望のモード」とは、ごく図式的に言えば、主体を享樂から遠ざけるシニフィアンの原理(フロイトはこれを「快原理」と呼んだ)に逆らうことに存する。だが、ラカンが示したとおりに、この「欲望のモード」の地平は、一方では、あらゆる「対象」(道徳的対象)の消滅という奇妙な局面(精神分析によってはいかにしても支持しがたい局面)へと、他方では、他者の享樂の虜となる以外には、純粋な消滅へと向かう道しか主体には残されていないという逆説へと、行き着いたにすぎない。とすれば、ヘドニズム的倫理の伝統にカントとサドを対峙させるラカンのまなざしは、そもそもいったいなにをめざしているのだろうか、と問われねばならない。ヘドニズムの重力圏の外部へ決定的な一步を踏み出したはずのカントも、サドも、それぞれ新

たな限界に突きあたらざるをえなかったのだとすれば、ラカンの主張はつまるところ「自己の欲望の極限にまで進んだ人にとっても、すべてがバラ色なわけではない」という一言に要約されてしまうのだろうか。

おそらくそうではない。ヘドニズム的な倫理が私たちの欲望をいささかも鎮めてくれないことは目に見えている。アリストテレスからエピクロスの門弟、ストアの学徒を経て、快樂人たるリベルタンに至るまで、およそヘドニズムが私たちを欲望の圧迫から解放してくれなかったのは、ラカンにしたがえば、その逆説を問いに付すことをためらい続けてきたからである。カントとサドは、この逆説を露わにするところまでは進むことができた。問題は、そこからの一步が、つまり「快原理の彼岸」へと踏み出すはずの一步が、いま述べたとおり、カントにおいても、またサドにおいても、袋小路にしか行き着かなかったことである。このことはしかし、ヘドニズムを超克する新たな「欲望の道」の選択肢が汲み尽くされたことをいささかも意味しない。脱ヘドニズム的倫理の構築に向けた探求は、ラカンにいわせれば、まだ若いのである。ラカンが精神分析に課したのは、この探求のバトンを引き継ぐこと、ただしカントともサドとも異なるしかたでそうすることであつたにちがいない。ラカンにおいておそらくは未完のままに終わったこのプロジェクトは、精神分析において、いまでも続けられている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

立木康介、ラカン派 1964-、思想、査読無、2010年6月号、岩波書店、74-100

立木康介、ナタリー・ジョーデル報告への序文、ジャック・ラカン研究 7号、査読有、2009、102-116

立木康介、結び目と振り子(下)、思想、査読無、2009年2月号、岩波書店、57-75

立木康介、結び目と振り子(上)、思想、査読無、2009年1月号、岩波書店、24-40

立木康介、フロイトとサド、思想、査読無、2008年4月号、岩波書店、6-21

6. 研究組織

(1) 研究代表者

立木 康介 (TSUIKI Kosuke)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：70314250